

「日向ひょっとこ踊り」

○ 最近、「日向ひょっとこ踊り」を観る機会に何度か恵まれ、この踊りに大変魅了されましたので、この場をお借りして皆さんにご紹介します。

ピーヒャララ…ピーヒャララ…ウン・トントン、ピーヒャララ…～

「日向ひょっとこ踊り」の歴史は、明治の初期、日向市大字塩見永田地区に開業していた眼科医の橘医師から神楽をベースにした踊りを伝授されたというのが通説で、「橘踊り」とも呼ばれているそうです。昔は稲荷神社へ奉納されていたそうですが、現在では、年に1度、8月の第1週に「日向ひょっとこ夏祭り」として開催され、今年は第26回として何と79団体約1,600名もの参加者を迎えたとのこと。また、地方の催し物等でも踊りが披露されています。

踊りは赤い着物に白い帯、白い禪をつけ、豆絞りの手拭いを被ったキツネ、オカメ、そして大勢のヒョットコが一つの連として笛・鐘・太鼓の軽快なリズムにのって、手、足、首と全体を使ってコミカルに踊るものですが、ちょっぴりエロチックでユーモアに溢れており、楽しい雰囲気を楽しむことができます。また、この面の表情はひょうきんで、3種類合せて18種類の型があり、手作りのため、顔の描き方や仕上げが微妙に異なるため、同じものはほとんどありません。このため、多くの連を観ても少しづつ雰囲気が違うことから飽きることがありません。

特筆すべきは、色白でメタボ体型の「ひょっとこ」の踊りがちょっぴり下品でこっけいなこと、「オカメ」の踊りに派手さはありませんがよく観ると地味な中にも変な動きを見つけられること、時折混じった小さな「ひょっとこ」の中に行く末恐ろしい踊りの達人が混じっていることです。

高千穂の「夜神楽」は超有名で誰でも舞うことは出来ませんが、「ひょっとこ踊り」はちょっとした練習と面と勇気があれば、りっぱな踊り手になれるかもしれんね！



(由来)

昔々、永田地区にひょう助、オカメという夫婦が住んでいたが、子宝に恵まれるよう毎朝近くのお稲荷さんに豆ん飯を供え祈願していた。ある朝、空腹の神主がうっかりつまみ食いをしたところ、怒ったお稲荷さんが狐の姿となって現れたものの、傍らにいた美しいオカメに目を奪われ、我を忘れて身振り手振りおかしく気を惹こうとした。そんな狐を見て楽しくなったオカメが後に続き、ひょう助やこの様子を木陰で見ていた村の若者達がこれは大変と引き止めようとする姿がこの踊りとなったそう。

— ひょっとこ面をつけた者は禪の前を長く垂らしており、面の表情や手足の動きと相俟って一見こっけいに見えます。